

ARTE における放送通訳者の役割

鶴田知佳子
(東京外国語大学)

The aim of this paper is to review the role of media interpreters at ARTE (Association Relative a la Television Européenne) which is a European cultural channel founded by Germany and France that broadcasts all of its programs bilingually. The interest is on how media interpreters are employed to transmit the news programs bilingually across the two cultures. ARTE had media interpreters working at the core of its identity to realize bilingual broadcasting of news programs. Through the visit and interviews, the author found there are two factors central to the role of media interpreters at ARTE, namely (1) translation of culture and (2) use of voice. Through discussion of the so-called ARTE model of interpreting, it is revealed that the attention to translating the culture in a way that is intelligible to the audience. This paper concludes with the implications of those two factors on media interpreting in Japan.

1. はじめに

文化背景が違う視聴者に、番組を二言語での放送として通訳・翻訳を介して伝える。これがフランスのストラスブールに本社をおく ARTE (Association Relative a la Television Européenne) の略。アルテと発音される)が行っていることである。特に一日に2回、昼の15分間および夜の30分間のニュース番組においては、放送通訳者を用いてフランス語とドイツ語の二言語で同じ内容の放送を実現している。放送通訳の研究の一環として、かねてより ARTE を訪れて実際に放送通訳がなされている現場を視察し、仕事にたずさわっている放送通訳者と意見交換をしたいと考えていたところ、2011年5月にその機会を得た。番組制作の担当者、放送通訳の統括責任者および放送通訳者3名に直接面談、および電子メールの交換などを通じて話を聞くことができた。本稿では ARTE がその20年を通じ、同じ内容をどのようにフランス、ドイツの視聴者に対し、それぞれにフランス語とドイツ語で伝えているかを検討する。さらに「ARTE モデル」と称される方式を定着させるにいたった事情を振り返る。そのうえで、この方式と日本での放送通訳の現状とを比較し、放送通訳者が果たしている役割についての考察を行う。

2. ARTE の概要

ARTE は、ヨーロッパで文化番組を放送する公共テレビ局である。以下、ARTE のウェブサイトに掲げられている英語での情報を中心に概要を述べる。ARTE の独自性は、異なった文化背景、特にフランスとドイツの両方の視聴者を目的としているところにある。ストラスブールにあ

る本局と、番組制作および配信を行う役割を担う2つの加盟局、パリにある ARTE France とバーデンバーデンにある ARTE Deutschland TV GmbH から構成される。ARTE はフランソワ・ミッテランやヘルムート・コール、ロタール・シュベートの描いた構想から始まった。ARTE 創設の父たちは、合同のテレビ局は文化レベルにおいてフランスとドイツの市民の結びつきを深め、ヨーロッパの文化における統合を促進すると考えた。フランスとドイツ両方の視聴者を念頭においたテレビ局の構想はテレビの歴史において初めての試みであり、グローバル化が進んだ今日でも、ほかに類を見ないといえる。ARTE は 1990 年 10 月 2 日、当時の西ドイツの 11 の連邦州の首相とフランスの文化相の間で調印された条約により誕生した。

その数ヵ月後 GEIE(Groupement Européen d'intérêt Economique 欧州経済利益団体) のひとつとして、ARTE は 1991 年 4 月 30 日に制定されたが、その制定法第 2 条には次のように使命が掲げられている¹。

The objective of this consortium is to create and produce television programmes of cultural and international nature in the broadest sense, to be broadcast by itself or by other channels, via satellite or any other medium. These programmes should aim to promote mutual understanding and unity among the peoples of Europe.

本団体の目的とは、広い意味で文化的で国際的な性質のテレビ番組を創出し、制作することにある。これらのテレビ番組は本団体もしくはほかのチャンネルが衛星放送ほかの手段を用いて放送する。これらのテレビ番組は、ヨーロッパの諸国民間の相互の理解と団結を促進することを目的とする。(筆者訳)

ARTE はこの翌年から放送を開始し、ヨーロッパのなかで質の高い文化番組の放送をするテレビ局としての地位を確立した。フランス、ドイツ在住の筆者の知人に聞いた限りにおいても、ほかの公共放送では大きくとりあげられないようなテーマ、たとえば日本の戦犯を扱った歴史番組、終戦直後のフランス社会の事情を伝える番組などが放送されているとのことである。ちなみにどのような放送局であるかの説明のために 2010 年のハイライトをあげる。シヨパン生誕 200 年、宮崎駿夫アニメ特集、生物多様性、FIFA ワールドカップを初めて開催したアフリカ特集、などである。2011 年 1 月の表明として、次のような説明がウェブ上に掲載されている ARTE の広報誌に載っている。

ARTE is different and will stay that way. Thanks to our creative and talented staff, the channel has maintained a strong Franco-German identity for 20 years and established its unique presence on the audiovisual landscape. ARTE is demonstrating its commitment to the digital age by bringing HD quality to its viewers, as well as exploring the potential of the Internet as a new space for freedom and creativity and livening up smartphones and social networks with its programmes.

ARTE は常にほかとは違う存在であり続けます。創造力がある才能豊かなスタッフにより、このチャンネルは 20 年間、フランスとドイツのアイデンティティを強く維持し続け、放送業界で独自の存在感を示してきました。ARTE はデジタル時代にも対応しており、質の高い HD 放送を行っております。さらに自由と創造力を促進する場としてのインターネットの潜在性を

探求し、番組をスマートフォン(高性能携帯電話)やソーシャルネットワークに載せることで活性化を図っています。(筆者訳)

この文章の下に会長の Veronique Cayla 氏および副会長の Gottfried Langenstein 氏の顔写真と署名が掲げられている²。

番組は必ず二言語での放送であるが、ドキュメンタリーやドラマ、演劇などは事前に字幕処理、もしくはボイスオーバーによる処理がなされる。コンテンツについては、2つの加盟局が制作するフランスとドイツ両国のものだけではなくて、ほかの外国、たとえばアメリカからの輸入コンテンツも含まれる。どのコンテンツを使用するかについては、月に一度開催の放送委員会を通じて議論がなされ決定に至る。ARTE でどのように番組制作がおこなわれているかを概観してみよう。まずストラスブールにある ARTE の組織がどのようになっているのか、ウェブサイトに掲載されている情報をもとに組織図を示す。ちなみに今回、筆者が訪問した部署は番組部のニュース担当部署、および総務部の語学担当と位置づけられている部門である³。

取締役会 (会長、副会長、番組部長、総務部長)		
会長室	番組部	総務部
会長	番組部長	総務部長
副会長	番組企画責任者	総務部次長
広報・PR 担当	放送・番組促進担当	技術担当
連携・管理担当	アート担当	財務担当
会長室長	ニューメディア担当	法務担当
	制作担当	人事担当
	ドキュメンタリー担当	語学担当
	ドキュメンタリー・ マガジン番組担当	販売担当
	映画・ドラマ担当	
	芸術・演劇担当	
	ニュース担当	
	番組制作担当	

表 1 ARTE の組織図

取締役会は、会長、副会長、番組部長、総務部長から構成されるが、それぞれ 4 年の任期

で、総会において選出される。総会は、加盟局である ARTE Deutschland および ARTE France から 6 名ずつの代表が出席している。ZDF および France Télévisions の会長は必ず含まれている。ARTE のパートナーに準じる立場であるテレビ局、RTBF(ベルギー)、TVP(ポーランド)、ORF(オーストリア)は総会に諮問する立場の代表を送ることができる。現在は ZDF の会長が総会の会長を、France Télévisions の会長が副会長を務めている。総会は年 4 回開催され、この放送局の事業計画を含む戦略的に重要な決定を下し、経営陣を任命する。

放送局の編成方針を決定する番組委員会は、番組部長およびストラスブールの ARTE から 3 名の代表者、加盟局である ARTE Deutschland および ARTE France より 2 名ずつの代表、および準パートナーから諮問する役割でのみ出席が認められている委員各 1 名より構成される。毎月 1 回、出資局および本社の提案を審議し、放送する番組を決定している。さらに番組については、ドイツ側 8 名、フランス側 8 名からなる番組諮問委員会がある。年に 4 回会合を開き、取締役会および総会に対して、番組について諮問をする。

2008 年に放送された番組は、およそ 3 割の番組がドイツで制作され、29%がフランス、26%がそのほかのヨーロッパ諸国、および 15%が海外(北米、南米、アジア、アフリカ、オーストラリア)で制作されたものであった。うち 41%がドキュメンタリー、21%が映画、10%がテレビ映画であった。20%が情報番組、10%が音楽・演劇・舞踊の番組、および 3%が短編であった。新規に制作される番組の割合は高く、夜の時間帯に放送される番組の 75%は初回放送である。

GEIE(欧州経済利益団体)としての ARTE は財務的に独立しており、予算を公開している。それによると、2009 年の予算規模は総額 401 百万ユーロ、収入は 95%テレビ機保有に対する直接の視聴料徴収からなっている。広告を出すことはできないが、企業のスポンサーを得ることはできる。また、ヨーロッパの公共放送各局との間で番組のうえでの提携を行なっている。支出は番組 251 百万、人事 55 百万、放送 48 百万、管理費 33 百万、通信 10 百万、マルチメディア 4 百万ユーロである。番組の内訳は、ドキュメンタリー 28%、ドラマ 15%、映画 15%、マガジン番組 13%、芸術・演劇 8%、二言語版制作 7%、ニュース 6%、夕方のテーマ番組 4%、ロイヤルティ支払い 3%、番組宣伝 1%となっており、二言語版制作に相応の経費をかけていることがわかる。職員数は 430 名、平均年齢は 42 歳、平均して局に 9 年間勤務している。番組はフランスとドイツにおいて、同時に視聴可能で一週間に 7 日、一日 24 時間デジタル放送と地上波、ケーブルテレビを通じて放送している。また ARTE が制作した番組は、販売担当を通じて国際的に配信されている。たとえば、歴史番組や個人に焦点をあてたドキュメンタリー番組が、ほかの放送局でも放送されている。

ARTE の視聴者については、フランス、ドイツ両国で以下のような数の視聴者が可能とみられる。フランスでは 530 万世帯が衛星放送に加入、ケーブルテレビには 290 万人が加入している。740 万人がデジタルテレビ、360 万人が地上波を通じて ARTE の夜 7 時以後の番組をみることができる。フランスおよびフランス海外県のほぼ全域がデジタルに入っており、アナログ放送からの移行は 2011 年中に完了の予定である。すなわち、ARTE の放送に入っていないなくても、フランスの公共テレビが視聴できる視聴者は、夜 7 時以後の ARTE の番組(後述する 7 時のニュースを含む)をみることが可能である。ドイツでは 1580 万世帯がケーブルに加入、1470 万世帯が衛星放送に加入している。360 万世帯がデジタル放送に入っており、30 万世帯が ADSL を通じ加入している。またヨーロッパ全域では、ベルギーで 400 万世帯、スイスで 300 万世帯、スペインではケーブルで配信および一部番組は国営テレビ局を通じ放送、オーストリアでは衛星を通じて 150 万世帯、フィンランドでは衛星を通じて 100 万、ポーランドでも衛星を通じて 44 万世帯が視聴可能である。合計すると、2009 年に、ARTE チャンネルを視聴可能な

は全部で 8000 万世帯、1 億 9000 万人であった。

3. 放送通訳の現状

3.1 制作者側からの説明

2011 年 5 月 18 日 15 時半から 16 時半に、ARTE を訪問して制作担当コーディネーターの Lothaire Burg 氏の説明を受けた。要点は以下のとおりである。

3.1.1 ARTE の成り立ち

長年、戦争が絶えず冷たい関係であったフランスとドイツの間で、文化的な面で共有できる良いテレビ局をつくりたい、ヨーロッパ統合のための理解の道を開きたいということで始まった。テレビとして国境をこえヨーロッパを統合させるプロジェクトとして、2 つの公共放送がヨーロッパのなかでの 2 つのパートナーとして開始した。当時のフランスには、公共放送として 3 つのチャンネルがあり、民間放送も増えてきて質の悪い放送も出てきたなかで、質の高い文化番組をつくるチャンネル 7 (Canale Sept) として発足した。

3.1.2 ARTE の放送

フランスとドイツそれぞれにアピールするやりかたは、両国の違いを踏まえるように工夫がされている。夜のゴールデンタイム(プライムタイム)はドイツとフランスでは異なっている。ドイツでは 20 時 15 分から、フランスでは 20 時 40 分からは夜のゴールデンタイムであるので、番組編成はそれを考慮しておこなわれている。番組案内冊子の体裁も違っている。フランスは週ごと、ドイツは月ごとに作られている。おおまかに以下のように曜日ごとに中心となるテーマが決まっている。

月曜:映画、マガジン番組

火曜:ドキュメンタリー、社会情報番組

水曜:歴史、フィクション、ノンフィクション

木曜:混合構成—ルポルタージュ、ドキュメンタリー、マガジン番組、アメリカのミュージカルなど

金曜:週末なので、娯楽性の強い、楽しめる内容

土曜:子ども用番組中心、ヨーロッパという情報番組

日曜:家族用の映画など

3.1.3 二カ国で放送する際の注意点

「同じ内容を二つの国に伝える」というのは、「まったく同じことを言う」とは違う。たとえば、Dominique Strauss Kahn 氏の問題について伝える場合、フランス人であればこの人物を良く知っているが、ドイツ人は同じ知識はない。逆にドイツの政治問題はフランス人には興味がない。プレゼンテーションの仕方を考えて興味をひきつける必要がある。もとのニュースがドイツ語で制作されているときに、通訳者がフランスの視聴者に伝える際には adaptation (翻案) を経る必要がある。

ドキュメンタリーのキャスティングの場合には、リアリティに近づけるため吹き替えが望ましいと考える。複数の話者が出てくる場合は、字幕ではわかりにくい。声のトーンのコントラストを考える必要がある。視聴者の視点からみると、インタビューをする人と答える人は違う声にするのが望ましい。

キャスティングは Krone 氏がおこなっている。二言語放送の際に、どのような優先順位でおこなっているかという点、1) 声優を使つての吹き替え、2) ボイスオーバー、3) 字幕となる。コンテンツによってどの手法をとるかを決めている。

3.2 放送通訳管理者側からの説明

2011年5月19日15時半から16時半に、語学業務責任者であり、AIIC(国際会議通訳者協会)の会員でもある Elisabeth Krone 氏の説明を受けた。同氏は20年間、いわば主任通訳者として、放送通訳者の統括を担ってきた。要点は以下のとおりである。

3.2.1 ニュースの放送通訳者の仕事体勢

ニュースは、昼12時45分から15分間、夜は19時から30分間放送している。当初は、ドイツ側とフランス側でニュース項目のみ共通のものを用意し、双方で別々にキャスターをたててニュース番組を制作することも試みたが、放送通訳者を使うスタイルに落ち着いた。すでに会議通訳者として長い経験と実力があり、放送の場でも活躍できる通訳者の存在があったからである。ちなみに、今回の訪問で話をきいた ARTE で活動している通訳者は Krone 氏自身も含め、全員が AIIC のメンバーである。AIIC では A 言語(母語)、B 言語(母語に準じる)、C 言語(この言語からの通訳は行いがこの言語への通訳はしない)という通訳言語の分類をしているが、ARTE でもこの分類にならっていて、原則的には C 言語ないし B 言語から A 言語方向への訳出となるよう、通訳者を配置している。

放送通訳者を使うスタイルに落ち着いたのはノウハウがあり、より迅速、安く、より良い内容の番組が作れるからであり、すべての関係者にとって実務的に便利な方法であったからである。品質の管理については、語学業務セクションで両方の言語での放送を毎日聞いて確認をしている。その際に内容の質、声の質の両方をみている。

放送のパターンとしては、隔週ごとで1週間ドイツ人キャスターに対して、フランス語への通訳者2名、次の1週間フランス人キャスターに対して、ドイツ語への通訳者2名というパターンを繰り返すことで落ち着いた。すでに16年間放送通訳者を用いて放送しているが、同時通訳者を起用することで「同じ放送を同じ雰囲気」で伝えることが可能となる。昼のニュースはキャスターが女性のため、通訳も女性。夜のニュースはキャスターが男性のため、通訳も男性を起用している。ゲストが登場するときにはゲスト1名につき、通訳者も1名ずつあてる。また、番組が終わった後、必ず短時間でもキャスター、通訳者、スタッフの間で反省会を開く。番組でうまくいったこと、いかなかったことを指摘しあう。

現在、ドイツ語、フランス語ともに女性、男性およそ4-5名の定期的に仕事をする人たちが決まっている。放送スケジュールはかなり前から決まっており、週当たり7日間、続けて仕事をできる人にきってもらっている。

放送のスタイルとしては、当初原稿を用意することなしに放送をした時期もあったが、まったくの同時通訳で行うのは難しいことがわかった。この16年間のあいだでは放送通訳者からの意見も取り入れながら、やり方も変わってきているが、現在は以下のようなスタイルに落ち着いてきている。結局は、質を重視するアプローチをとった結果、ライブのニュース番組は通訳者を使ってフランス語とドイツ語の二言語の放送をすることに落ち着いた。夜のニュースの場合、30分のニュース番組のなかでキャスター部分は15分から20の間である。ニュースパッケージのなかの音声は、字幕やボイスオーバーなど、他の方法ですでに二言語になっている。たまたま筆者が訪問中に見学した、カンヌ映画祭からの河瀬直美監督への生のインタビューが入っ

たニュース番組の場合など、ごく一部の例外を除いてすべて事前に原稿がある。

3.2.2 手順

当日、10時から11時くらいのあいだに、ニュースの放送項目を選定する会議が開かれる。キャスターが自分の読み原稿を編集し、放送の際に読むテレプロンプターに載せる。この素材はネットワークソフトウェアに送って、関係者全員が共有できるようにする。パソコン上では、ライター、APなど通信社の情報もみることができる。

通訳者は放送1-2時間前にキャスターの読み原稿を入手。翻訳、翻案(適応)をおこなったのち、編集者に確認をとる。たとえばフランス語に通訳をする現行の場合にはフランスのジャーナリストが検討して、フランスの視聴者に向けてARTEが放送局として伝えるのに適切な内容となっていることを確認する。通訳者が自分の原稿としてつくっているものは、ドイツ人のキャスターが言っていることとは違っていることがある。現行のタイミングの問題に対応する必要がある。オリジナルのデリバリーの「間」はそのままにする必要がある。キャスターが息継ぎをしているときにはフランス語版でも息継ぎをしている必要がある。キャスターがカメラの方向を向いているときには、間を同じときにとるように、配慮が必要である。画面に出ている映像との齟齬がないようにしなくてはならない。18時半にリハーサルを行なう。リハーサルで、原稿が時間通りに収まるかの確認を行なう。放送が始まった後は、キャスターがテレプロンプター上のオリジナル原稿にあわせて読むのにあわせて、翻訳した原稿を同時に読み上げる。

ニュース以外のビデオクリップに字幕、もしくはボイスオーバーをする際には、テキストを起こすが、音声認識ソフトを使って原稿を起こすこともある。

放送において、どの程度の音量でオリジナルの音声を流すかも、2つの言語において若干違っている。いままでの経験上、次のようになっている。ドイツ語で放送通訳をするときには、フランス語の元の音は低くしている。フランス語の放送通訳のときには、ドイツ語のオリジナルの音はフランス語オリジナル放送のときよりも大きな音量で流している。フランス人視聴者は、通訳がオリジナル音声からの刺激を受けておこなわれているとわかることを求めているためである。当初は、オリジナルの音声は両方ともきわめて低い音量で流していたが、視聴者からの要望を分析した結果、このように方針を変えた。

聞きやすい音になっているか、これが重要な問題であり、毎月必ず音質についての会議を行っている。

3.2.3 放送通訳者に必要な心構え

放送では、オリジナルのあとに通訳が「こぼれない」ことが大事である。通訳者は話す専門家として、「迅速」「完璧な語学力」「テレビに適切な話し方」ができることが必要とされている。

声の管理が非常に大事である。ストレスが声に出るようになってはならない。ことばがはっきりと発声できるように、しっかりと準備を行う必要がある。女性通訳者の問題として、声のトーンが高くなりすぎないようにする、早く話しすぎるということもあってはならない。

また放送通訳の心構えとしては、次の点があげられる。

- ・本当の意味で言語をつかひこなせることが必要。話し始める前によく考える。
- ・オリジナルの密度が高いときには、要点を伝える。
- ・能動的、分析的に考えることができる。
- ・キャスターが話し終わったあとですぐに終わる。

さらにもうひとつの条件は「声が若々しい人」である。またジャーナリストといっしょに仕事をしたい人、ニュースの現場に適応可能で協力的な人を求めている。

通訳者として、キャスターの原稿を自分で翻訳して翻案し、それを自分の声で伝えるので、ジャーナリスティックな要素も要求される。さらに、キャスターとの相性がよい人が望ましい。毎日、ニュースに登場するような話題は新聞等で確認していること、時事問題を把握していることが必要である。

視聴者側からみて大事なものは、放送通訳者の声に共感できるものが感じられるか否かである。そうできれば、仕事は半分終わったようなものである。放送通訳者は、常に聞いている人のことを意識して仕事をしなくてはならない。

3.2.4 放送通訳者に依頼しておこなう新たな試み

2010年6月から、ニュースではないが、通訳者が自宅で5分間のビデオをストラスブール本社のスクリーンサーバー上からダウンロードして、自宅のコンピュータで作業し、通訳音声をいれて編集、またサーバーに送ることができるようになった。まだ実験的に行っている段階だが、これは通訳者の役割だけではなくて、音声技術者や編集者の役割までを含む仕事である。まだ、放送できるほどの音質の高いものになると、ファイルが大きすぎて自宅パソコンで作業するためのやりとりが出来ないため、当面はウェブ上でみられるもののみ、に限定されている。

3.2.5 放送通訳者の陣容と報酬

最初から Krone 氏が語学部門の責任者を務めているが、通訳者がこの任についているからわかることもある。質の高い通訳者を求めてきた結果、全員が AIIC の通訳者であり、またパリ第三大学通訳翻訳高等学院 (ESIT) で教員を務めている通訳者も多々業務にあたっている。顔ぶれはほぼ固定していて、何かで特別に人手が必要というとき以外、新人が入ることはあまりないが、その際にも ESIT の教員から紹介されてくることが多い。

報酬については、会議通訳の通常レートと同じく、一日あたり 770 ユーロ(現在のレートでユーロは 120 円程度、したがって 92000 円程度)、5 分間のビデオは 200 ユーロ(同 24000 円)と、会議通訳と遜色がないように設定している。

昼のニュースと夜のニュースと両方を行う場合には、一日あたりレートの 1.5 倍となる。夜のニュースにかかる時間は、16 時半から 19 時半である。昼のニュースも担当する場合、9 時半から 19 時半が業務時間となる。

3.3 放送通訳者の意見

2011年5月9日、17時から19時にかけて、スカイプを通じて東京とブリュッセルを結び、Vincent Buck 氏にインタビューを実施した。フランス語 A、ドイツ語 C、英語 B の通訳者で、ARTE ではドイツ人キャスターの部分フランス語に放送通訳する仕事を、毎月1週間、ないし2週間担当している。ブリュッセル在住で仕事のときは、ストラスブールに滞在する。すでに10年近く ARTE で仕事をしているが、放送通訳者になったきっかけはダイアナ元皇太子妃の葬儀の放送通訳を担当したとき、評判がよくて紹介をされてニュース番組に定時の通訳者として入るようになったからだという。以下、要点を述べる。

ARTE で放送通訳者が行っている仕事の内容は、会議通訳者の内容とはまったく違う。ジャーナリストの役割に近いものがあり、「ローカリゼーション」と言っている内容である。フランスの視聴者に向けて放送するために訳出する際に求められるのは、単語ひとつずつの置き換えで

はない。たとえばドイツの選挙について伝えているニュースの場合、ドイツの視聴者はドイツの選挙についてフランスの視聴者よりもはるかに多くの知識をもっている。フランスの視聴者がドイツ選挙のニュースを良く理解するためには、どのようにニュースを伝えるのか、若干違った角度からの報道を提供する必要がある。通訳者が行っていることは、読み原稿を完全に書き換えるローカリゼーション、あるいは翻案である。しかしなんの監督もなしに勝手に書き換えているのではなく、プロのジャーナリストの確認のもとで行っている。ARTE が放送局として伝えるのに適切な原稿になっているためには、オリジナルの原稿からいったん「切り離して」考えてみる必要がある。また、声の面で気をつけなくてはならないのは、オリジナルのデリバリーの「間」はそのままにするということだ。キャスターが息継ぎをしているときには、フランス語版でも息継ぎをする必要がある。フランスとドイツの二カ国では文化や態度がかなり異なっている。概念や用語の管理に統一を図るということでは、チームワークも重要である。会議通訳では、チームワークはある会議の間だけだが、放送通訳の場合には、より長期間にわたりいくつかの番組を通じて続いている。

通訳者を使うのは、それが最善の解決方法であるからだ。視聴者からの意見を聞くと通訳者は「邪魔な存在」とみられることもある。みな一人の声を聞けば用が足りるようになってほしいと思っている。そのため、通訳者の「キャスティング」が行われている。通訳者は自分の声を使って視聴者をとりこにするのである。通訳プロセスにおけるデリバリーはすべてが「意味のあるもの」でなくてはならない。ドイツ語、フランス語において同じ人たちが長年仕事をしている。通訳がぴったりマッチしていないと、視聴者から指摘がある。

また、放送通訳者は迅速でなくてはならない。さらにドイツとフランスではニュースの伝え方のスタイルが違う。ドイツでは、ニュースは厳粛であり笑いの起こるような対象ではない。しかし、フランスの視聴者にはもっと「明るく伝える」必要がある。あまり厳粛な言葉遣いではなく、ときには言葉遊びも入れるような工夫が必要だ。10年前に自分がこの仕事についたとき、たったひとつ受けた指示は「魅力的な放送にしてほしい」というものであった。その際に使えるものはただひとつ、「自分の声」のみである。テレビでは黙っていることはできない。視聴者は「空白を嫌う」。放送通訳のスタイルとは、正確性もさることながら、スムーズなデリバリーが求められる。焦点はデリバリーである。空白があかないようにするためのフレーズを使わなくてはならなかったとしても、沈黙は避けねばならない。そのためには準備が必要であるし、議論がどの方向に向かっていくのか、内容を把握している必要がある。

放送通訳者にとって大事な点は、キャスターとのマッチングであると考えている。

- ・声の感じがあっていること
- ・キャスターの性格をよくつかんでいること

番組のフィードバックとしては、自分に直接コメントがくるのではないが、固有名詞がドイツ語で出ていて、フランス語で出ていない場合など、苦情がくることがあると聞く。しっかりと両国語で聞いている視聴者がいる。ほか、番組へのコメントは直接ではなくても、局の人やキャスターにくるメールなどをみてわかる。

このように放送通訳者を用いる方式の利点は、通訳者であれば、最終段階で急な変更があったものにも対応することができることにある。ニュース番組の場合には急な変更も珍しくはないが、「リーダー」の場合には急な変更への対応ができない。ARTE の主任通訳者の Krone 氏が現在の方針を確立した。Krone 氏自身、放送通訳は行わないが、社内会議の通訳は行っている。社内通訳者も非常に質の高い人たちが働いている。

放送通訳者以外のやりかたでやろうとすると、かなりの不都合があったために、結局は通訳

者に依存することとなった。放送通訳者はすべてフリーランスの通訳者であり、様々なところからストラスブールにきて仕事をしている。

優秀な放送通訳者は健康状態が良好でなくては務まらない。通訳者はまずよく睡眠をとること。放送をする 2 時間前からはコーヒーを飲んではならない。声が乾いた感じになり、聞いている人に伝わってしまう。食生活の管理も必要である。放送の仕事をするには健康的なライフスタイルの維持をせねばならない。

ARTE では、単発の仕事で急な依頼として受けることがある。たとえば、特別の放送が急遽夜にある場合、当日の朝の電話で夜の仕事を依頼されることもある。技術的な条件が全て整っていないテレビ局で仕事をするような場合には、通常は会議通訳しか行わない通訳者が急に放送通訳をしようとして困難をきたす場合もある。しかし、ARTE の場合には放送通訳ブースが整備されていて、常に音声技術者も待機している。たいへん仕事のやりやすい環境であるのは特筆すべきである。技術者や設備が整備されたなかで仕事をおこなうことができる。ここでの仕事環境には非常に満足している。

3.4 実際のニュース放送

筆者が実際に放送現場を見学した、2011 年 5 月 19 日放送の 7 時のニュースから具体的な点をいくつか挙げる。ニュースの構成はこの日はまずは Dominique Strauss Kahn 氏の辞任、オバマ大統領の安全保障についての発言、シリア情勢とカナダ人ジャーナリスト監禁、ポルトガルでのスト、フランスの教員のデモ、などのあとで、カンヌ映画祭から河瀬直美へのインタビューがあった。放送通訳者はキャスターの放送通訳者以外に河瀬直美監督へのインタビューを行った女性リポーターのドイツ語への通訳、河瀬監督の答えのフランス語への通訳担当の女性通訳者、ドイツ語への通訳担当の女性通訳者、合計 4 名が番組終わりのテロップとして名前が示された。以下、当日の放送を見学して気付いた点に加え、フランス語版、ドイツ語版の DVD をあらためて視聴し比較し明らかになった点を述べる⁴。

- ・ フランス人キャスターの話している部分、ニュースのリポート部分については、ドイツ語でもほぼ一対一の対応になっている。
- ・ 視聴者に知識がないところは補うという試みがみられる。字幕においてはフランス語で DSK: La démission、ドイツ語版では Trauriger Rücktritt と名前はださず「残念な辞任」としているが、DSK といえばストロスカーン氏は大統領有力候補で今後は選挙戦に注力するために職を去るのではなく、スキャンダルで去ることを「残念な」とひとこと説明を加えている。
- ・ キャスターが一人称で視聴者に話しているところ *comme je disais tout à l'heure* 「先ほどお伝えしたように」は、ドイツ語ではなく「ストロスカーン氏はこうした」と客観的に伝える言い方になっている。ドイツのキャスターはスポーツニュース以外「自分」とはいわない。
- ・ シリア情勢のところアルジャジーラの映像がはいったところは、フランス語では *rectifier de vous même* 直訳すれば「皆様ご自分で気付かれたと思いますが」といっているが、ドイツ語は「アルジャジーラの映像でした」となっている。
- ・ フランス人キャスターが生で河瀬監督にインタビューしていた答えの部分はフランス語版とドイツ語版で違いがみられた。
- ・ フランスの教員のデモのところ、フランスの高等学校と大学入学資格試験(国家試験)にあたるリセー、バカロレア、がドイツ語ではドイツの高等学校と大学入学資格試験(国家

試験)にあたるギムナジウムとアビトゥーアに置き換えられていた。

- ・ 河瀬監督の答えの部分は、生放送であるがフランス語版、ドイツ語版ともに、日本語での答えが始まってすぐに沈黙せずに通訳をするため、あたりさわりのない「ところで」、「この問題に関しては」といったような沈黙を埋めるための言い回しを用いている。

スタイルとしては、フランス語版は France Télévisions ドイツ語版は ZDF のニュースのスタイルに近いことがわかった。フランスの公共放送のニュースの伝え方では、たとえば Dominique Strauss Kahn 氏の問題で「暗雲がたれこめています。状況が悪いのでしょうか」とキャスターのコメントがあってから VTR に入るスタイルがとられるが、ドイツのニュースの場合は NHK のスタイルに近く、「このような状況になっています。IMF 専務理事の Dominique Strauss Kahn 氏の事件です」と説明を加える。一般的にいて、事件現場の状況を伝える場合に、フランスのニュースでは「この人物によると現場の状況はこうです」と報道するところを、ドイツのニュースでは「状況はこうなっている」と何のニュースかを伝えて、「何々という人物はこう言っている」と報道する。情報の呈示のしかたがフランスのニュースとドイツのニュースでは違うが、同じ項目のなかで、入れ替えがされていた。

キャスターが伝える口調についても、前述の放送通訳者 Vincent Buck 氏の意見にあったように、フランスのニュースのほうが明るい口調、ドイツのニュースのほうが重々しい真面目な口調、というもみられた。ニュースの内容について、フランス人キャスターは *C'est exactement ça* 「そのとおりですね」といった短いコメントを挟むが、それもドイツ語版にはない。キャスター部分のドイツ語への訳では客観的な言い方に徹するという姿勢が貫かれている。「一人称を使う、使わない」というのもその一つの反映といえよう。

フランスの学校についての話題において、高等学校と高等学校修了試験をドイツでの呼称におきかえるのは、システムが違うのに同じ呼称にすると誤解を招く可能性が生じるとも考えられるが、わかりやすさが優先されている。

ARTE について、ESIT 教員でもあり、かつて定期的にニュース番組の放送通訳にたずさわっていた Colette Laplace 氏があげている例 (Laplace: 1997) では、パリのファッションショーが終わったとニュース項目冒頭でキャスターが伝える部分で、ドイツ語ではモデルが「メイクを落した」となっているところを、「私服のジーンズに着替えた」と言い換えたものがあった。モデルがメイクを落とすというのはフランスの視聴者にはモデルの華やかさと齟齬がある表現で、違和感があるためと指摘されているが、このように視聴者が聞いて自然であることが優先されている。

カンヌ映画祭の河瀬直美監督へのインタビューでは、作品の中に出てくる自然との関わりについての質問で、「万葉集」「男山」「女山」といった固有名詞をどう訳出するかでドイツ語版、フランス語版の訳出の仕方がドイツ語は固有名詞を活かし、フランス語は説明的に訳すと異なっていた。また震災についての言及があったところで、フランス語版で一回、原発と原爆を聞き違えたところがあったが、生同時通訳ならではの問題である。

以上を総合すると、フランス人キャスターがニュース番組として伝えている内容を、ドイツ語キャスターがあたかもドイツ語を話しドイツのスタイルのニュースであるかのように伝えている。尺にぴったりと合うようにするため、話の本筋として重要点を伝え、時間の余裕があれば細かなところを入れている。すでに原稿があるところは、吹き替えのように訳しているという感じを与えないように仕上がっている。その意味で、通訳者はライターと声優を兼ねた役割を果たしている。二言語で同じ内容を放送しようとする、時間に追われるニュースの場合はフランス語、ドイツ語それぞれで項目を選定し構成をしていく作業を通じ意見調整を経て別々の番組を作るより、

作った番組を中立な立場の通訳者を起用し、伝える選択がなされたとも考えられる。ただ、臨場感が大切な生のインタビューの場合には、事前原稿を作成できないため同時通訳の限界が現れる。

4. ARTE の放送通訳の特色

以上述べてきたことを振り返り、ARTE の放送通訳の特色を考察する。放送局の発足当初より試行錯誤を経て、「番組制作にあたってパラレルな番組を 2 つ作るのではなく」、あくまでも「共通である内容を通訳することで」「文化を伝える」という ARTE のミッション(使命)を実現しようとの努力がなされてきたことがうかがえる。結果的に、通訳者を介して二言語での放送をおこなうことが ARTE の使命に合致するものとして、いわば「ARTE モデル」が構築された。二言語での放送であることがいわば ARTE のアイデンティティであるといつてよいであろう。最初から 2 つの視聴者層を想定して番組を制作していることが、ひとつのテレビ局の制作している内容を二ヶ国語放送にしているのとはまったく違う ARTE の独自性である。それを支えている一つの要素としては、フランスとドイツの加盟局がコンテンツ制作のかなりの部分を負っていることがある。また、ヨーロッパの他の国やアメリカなど世界の他の地域からのコンテンツについては、フランス語、ドイツ語両方の視聴者が理解できるように字幕処理、ボイスオーバーなど語学部門が業務を支えている。

生放送ではないドキュメンタリーの場合には、フランス、ドイツ両方の公共放送の制作部門で字幕もしくはボイスオーバーを担当するか、もしくは入札にかけてボイスオーバー制作会社を使っているという。通訳者を起用するよりコストが抑えられるが、時間の制約との兼ね合いが重要と思われる。

ちなみに、ニュースを放送する時間帯は、妥協の結果決定されたと考えられる。ARTE における文化の翻訳について Colette Laplace 氏の論文(Laplace:1997)が書かれた当時は、夜のニュース番組は午後 7 時半開始であり、番組名も 7½と文字通り 7 時半始まりであることを示していた。食事の時間がフランスとドイツでは違い、ニュースを視聴する時間帯が違うのを歩み寄った結果が現在の 7 時になったと思われる。

この ARTE モデルを実行に移すうえで、放送通訳者が働きやすいように環境が整えられている。この点は、当初より ARTE での放送通訳者の統括に携わってきて、自身も通訳者である責任者の Krone 氏が、語学部門の責任者を務めながら、通訳者から仕事の遂行に関して随時事情を聴き、通訳者にとって働きやすい環境を提供することに努力を続けてくる中で、現在の姿になったと思われる。

今回、実際に訪問して視察したうえでも、また現場で業務にあたっている通訳者の声を聞いた限りでも働きやすい職場であるのは明らかであった。大切にされているのは主に 2 点である。(1)「文化の翻訳」。どうすれば、自分が訳出している言語の視聴者に伝わりやすいのか、この点を第一に考える。一語一語対応の訳出ではなくて、翻案にあたる。その際には自分の持っている知識をすべて動員して、たとえば比喩が用いられている場合には同じ比喩を使うのではなくて、その比喩が訳出言語の文化圏ではどのような言い方で同じ効果を伝えられるのかを考えて訳出原稿を作っている。(2)自分が訳出している言語の視聴者に伝えるのに「声」が大事である。基本的には訳出原稿を作って「読み上げて」いるのだが、「棒読み」ではなくて画面に出ているキャスターがあたかも、訳出言語で話しているように「伝える」のに努力をしているとのことであった。そのためには、前日より睡眠をよくとり、放送 2 時間前からはコーヒーすら飲まず、声に影響がでないように注意するという自己規律が徹底している。これは、筆者が話をき

いた通訳者全員が述べている。語学部門の責任者が、注意点として新規に入ってくる通訳者に必ず伝えていることであろうと思われる。

5. 日本の放送事情との比較

日本では、現状で日本語以外の言語が放送にあらわれている場面として、以下のものがある。本稿では放送通訳者が介在するものを取り上げている性質上、主としてニュースの放送について述べる。

音声	形態
日本語が主音声・外国語が副音声	国内向けの放送を英語に訳出 海外のニュースを日本語に訳出
日本語が主音声、外国語が副音声	外国の放送局コンテンツを 日本語同時通訳音声にて放送
英語が主音声	国際放送

表 2 日本における日本語以外の言語が放送される番組の形態

日本語以外の言語が放送される番組の形態は以下の 3 つの場合に区別される。一つ目は日本語が主音声、外国語が副音声で聞こえる場合で、これを A と称す。その中で、A1「国内向けの放送を英語に訳出する場合」、A2「海外のニュースを日本語に訳出」がある。日本語が主音声、外国語が副音声という、外国の放送局コンテンツを日本語同時通訳音声にて放送する場合を B と称す。最後に、英語が主音声である国際放送を C と称する。

番組の対象とするのは日本の視聴者であるが、日本に在住もしくは短期滞在している外国人に日本で放送するニュースを伝えるというのが A1 である。この例としては NHK の総合テレビでの 7 時のニュース、9 時のニュースの英語副音声での放送があげられる。テレビ番組欄には二ヶ国語放送を示す「2」の文字が記されている。英字新聞の記述をみると *bilingual* であることが表示されている。かつては TBS でもニュース番組の二ヶ国語放送を行っていた。またフジテレビが日韓共同のワールドカップ開催の期間のみ、夜の遅い時間のニュースを二ヶ国語放送したことがあった。番組欄の表示で二ヶ国語となっても、NHK 衛星放送の野球中継のように、元の放送が英語であっても、それに対応する訳出を日本語で放送しているのではなくて、日本語の解説が主音声になっている場合にはここに含めない。

A2 の例で定時放送として行われているところでは NHK 衛星放送が第一にあげられる。現在、NHK 衛星放送のワールド WAVE という朝の番組で行われているのは世界の 18 の国と地域における 23 の放送局のニュースである。基本的には、それぞれの国の視聴者に向けて制作されたコンテンツを、通訳者を介して日本語主音声で放送している。あるいは、突発的に重要な海外ニュースがあった場合、民放でも同時通訳者を起用して放送する場合がある。最近の例で言えばイギリスのウィリアム王子の結婚式中継がそれにあたる。

B の例としては、イギリスの BBC ワールドやアメリカの CNN が日本で放送通訳を用いて放送されている。この場合には、英語が副音声である。番組の内容は世界の視聴者に英語で伝えることを主眼に制作されているが、CNN の場合には、一部アメリカ国内の視聴者向けに放

送されるコンテンツも用いられている。

C の例として、NHK の国際放送があげられる。日本に関するニュースを含む内容を英語で制作して放送している。この場合にはもともと海外の視聴者に対して英語で放送することを意識してコンテンツを制作している。かつて、NHK 衛星放送で外国人デスクやライターを多く起用して、*Japan Business Today* という経済ニュース番組が制作されていたことがあり、英語での放送を日本語主音声で、同時通訳者を介し放送していたが、これは国際放送ではなく A2 の例に入る。

上記の ARTE モデルとの比較をおこなってみよう。違う文化のもとで放送されたコンテンツを、違う文化の視聴者の言語に訳出という共通項に照らして、対象となる視聴者から分けて考える。まず訳出する視聴者の対象が、主として日本在住の外国人である場合、これは A1 に分類される。訳出する視聴者の対象が、主として日本人である場合は A2 および B に該当する。以下でそれぞれの形態について、どのように放送通訳が行われているかを述べる。

5.1 訳出する視聴者の対象が、主として日本在住の外国人である場合

A1 の場合には、「ライター」とよばれる日本語のニュース原稿を英語のニュースにリライトする人たちがニュース原稿を入手して、英語原稿を作成する。それを「リーダー」とよばれる英語母語話者が、画面にあわせてそれぞれのニュース項目の時間内におさめるように英語原稿を読み上げている。突発的な事件、事故、災害があったときのために同時通訳者が待機して、ニュース原稿の作成に間に合わなかった場合に備えている。NHK 総合テレビの場合も、現在は放送が行われていない民放の場合も基本的にはこの体勢をとっている。ただし、ライターの用意できる原稿が多いか、同時通訳に依存する割合が多いかという比重の違い、および用意した原稿を読み上げるのが「リーダー」なのか同時通訳者であるかの違いはある。現在はないが TBS のニュース番組の例では、原稿がライターのところに回ってこない場合が多く、結果的に同時通訳者の出番が多かったという。なお、フジテレビの場合にはニュース原稿を用意するところから二人の同時通訳者が行っており、同時通訳者がライターを兼ねていた。この意味ではいちばん ARTE のやり方に近かったといえよう。ただし、ARTE の場合にはニュースの中で挿入されるビデオクリップの処理は、すでに字幕処理もしくはボイスオーバー処理が別途行われているが、フジテレビの場合にはこれもすべて同時通訳者が行っていた。

またもう一点特筆すべきは、日本における外国人に英語で伝えるといった場合、英語を解する人がどのような文化背景の人であるのかがわからない点である。英語が事実上、世界の共通言語となっている現状では、英語でニュースを伝えると言っても、何も英語母語話者だけを対象としているのではない。この点は ARTE での放送通訳者が明確に特定できる文化圏を想定した訳出を行っているのとは大きな違いがある。

5.2 出する視聴者の対象が、主として日本人である場合

A2 の場合には世界の 23 放送局が原則として自国・地域向けに放送している内容を、明確に日本語の母語話者に対して特定して訳出を行っているという意味で共通項がある。B の場合にもそれは同様である。ただ、主音声としては、あくまで元の放送を出しており、日本の市場で行っている放送業務として副音声で日本語を提供しているという立場の違いがある。この 2 つとも ARTE と比べて違いがあるのは、原則としてニュースパッケージに含まれているビデオの部分、たとえば街の人の声を聞くのにあたり、複数の話者が登場するビデオクリップが挿入されていても、その部分とも、一人の放送通訳者の音声で放送が行われる点である。ARTE の

場合には上述のように、すでにビデオクリップの部分は字幕処理、ないしボイスオーバーがおこなわれており、複数の話者が登場しているということがよくわかるようになっている。

もうひとつ大事な要素は、通訳者が事前に原稿が入手可能であるかどうかである。ARTE の場合には原則として原稿はすべて入手できている。よほど突発的に最後の最後になって変更があるのでない限り、その日のニューストップはすでに予想がされており、原稿も随時できあがったものから、放送にあたる本人が翻訳にあっているので、内容をよく把握している。さらに、文化的な違いを考える上でも視聴者を想定したうえでどのように翻案すれば、情報の本質をよりよく伝達できるかを熟考する機会がある。日本で現在行われている放送通訳は、いわゆる時差通訳といわれ、ある程度の準備時間があって放送に出す場合のものでも、短い場合は数十分、長い場合でも数時間程度と時間の余裕がない場合がほとんどである。特に B の場合にはまったくの生同時通訳となることも少なくない。

6. 結びにかえて

以上、ARTE モデルといわれる ARTE での二言語での放送の方法、日本の放送通訳の現状、両者の比較を述べてきた。ここで、ARTE の特質と思われる 2 点、「文化の翻訳」並びに「声」を振り返って、質の高い放送通訳のためには何が必要であるのか、結びにかえて論じる。

一点目の文化の翻訳については、目標言語の文化を共有する視聴者の姿がみえているか、どうかは重要である。どのような目標文化を対象としているのか、その姿を明確に描くことができている場合には、その視聴者のために一語一語の翻訳ではなく、翻案をすることができる。

ももとの放送が自国・地域の視聴者のみを対象としている場合、その国・地域ではこのように伝えたという雰囲気をよくあらわすために、文化の異質性を強調するような表現を残しておいたほうがよい、との考えも成り立つ。元の放送が CNN インタナショナル、BBC ワールドのように地域限定でなくてグローバルな英語話者を対象としているものであっても、英語固有の表現をどの程度まで日本語に置きかえてよいものか、それは常に放送通訳者が悩むところである。一言で明快な指針を出すことはできないが、放送通訳者ひとりの判断だけでなく体制として、どのような表現をするのが適切なのかを常に確認できるようであると心理的負担の軽減につながる。

その際に必要なのは原稿と時間である。いくら一人ひとりの通訳者個人の通訳スキルが優れていたとしても、元となる原稿が確保できるか、さらにそれを元に考える時間が確保できるか、この 2 点が非常に大きい。通訳はただの「ことばの置き換え」ではない。オリジナルが存在するとはいえ、翻案を行うというクリエイティブなプロセスだろう。完成度の高いものをめざすためには、相応の時間が必要である。ただしニュース番組の場合には、ニュースの本質上、限られた時間の中でどのように作業効率をあげていくのかが問われている。また前述のように、ARTE におけるジャーナリストであって放送原稿を確認する役割の担当者が、その都度助言を与えられるような体制が望ましい。

二点目の「声」について、視聴者が聞いているのは「声」であるので「声」を通じてわかりやすく伝えられているかが実は大きな役割をしめている。通訳者の指摘でもあったように、放送に通訳者が使えるのは「声」しかない。キャスターの場合にはジェスチャーを使えるが、そのキャスターにあわせて「忠実な声」として伝えている通訳者は、自分の声で「わかりやすく」そして「興味深く」内容を伝えていく工夫が求められている。

話し方の訓練を受けることは有効であろう。通訳者は優れたパブリック・スピーキング能力が求められる職業である。日ごろより、この方面での研鑽を積み、聞きやすい声、話し方でニュー

スを伝えられるような心がけが必要なのは言うまでもない。

以上、ARTE の場合から日本に敷衍できる特質について述べてきた。ARTE の二言語での放送では、それぞれの国の視聴者が翻訳されたものという違和感なく受け入れられるように、放送通訳者はその役割を果たしている。

会議通訳や商談通訳と違い、放送通訳では視聴者のその国と文化に対する知識のレベルを考慮しつつ、文化の違う視聴者にわかりやすく伝える姿勢が常に問われる。日本で放送通訳に携わる者としては、日本では知られていない時事問題、固有名詞は説明を補って訳したいが、尺の限られたなかでそれをどう工夫をするのか、また外国のニュースを聞いていると意識している日本の視聴者に、元のニュースの中に込められた気の効いた表現はできれば残したいという葛藤がある。今回の ARTE 訪問において、ニュースとして違和感のない話し方でわかりやすく伝えるという放送通訳の原点は、共有されていることを再確認した思いであった。

.....

【謝辞】 今回の訪問調査において協力して下さった全ての関係者にお礼申し上げます。また、訪問調査にあたってはパリ第三大学通訳翻訳高等学院 (ESIT) 教員のベルジュロ伊藤宏美氏および同校学生のドゥボー都留アンナ氏の助力を得たことにあわせて感謝申し上げます。

.....

【著者紹介】 鶴田知佳子 (TSURUTA Chikako) 東京外国語大学教授。専門は通訳・翻訳論。主な論文に「大学院における通訳実技指導の評価の枠組み」(『東京外国語大学論集第 69 号』2004)、「放送通訳における訳語の選択 イラク戦争報道の例」(『目白大学人間社会学部紀要第 4 号』2004)がある。

.....

【注】

1. ウェブサイトは原則フランス語とドイツ語であるが、一部英語に訳されている。
2. ウェブサイト、The European Culture Channel arte より引用。
3. ウェブサイトより筆者作成。
4. フランス語・ドイツ語ともに母語話者に近い知人二名の協力を得た。

【引用文献】

ARTE. (2011). The ARTE group. [online]

http://www.arte.tv/fr/a-propos/ARTE--The-Channel-_5Bengl-5D/2197470.html.

(July. 13, 2011).

Laplace, C. (1997). L'interprétation simultanée à la télévision : aspects culturels. *Terminologie et Traduction*, 3, pp. 121-141.